

博士論文の概要

専攻名 国際学研究専攻

氏名 三浦 美恵子

1. 論文題目

障害と能力・才能は共存する－2E 教育的観点からの研究－

2. 論文の概要

本研究は、障害と能力・才能が共存する事例研究を行うことを目的とした。先行研究やアメリカにおける実践例等を検討した上で、音楽と美術の能力が引き出された 2 人の実例を示し、発達障害を持つ人々の療育と指導の在り方について具体的な示唆を得た。

第 1 章「特別支援教育の対象となる児童生徒」では、特別支援学級に在籍する日本人と外国人児童生徒について概観し、とりわけ発達障害に注目した。また、2016 年に文部科学省が実施した 25 市町の特別支援学級における外国人児童生徒の在籍状況調査から、外国籍・外国につながる（片親が外国人である等）・日本人の児童生徒の在籍状況について整理・検討した。今後の課題として、障害が疑われる子どもの就学先が決定されるプロセスや日本における障害の定義が外国人の児童生徒においても妥当なものか検討すること、多文化背景の子どもたちに適したアセスメントの必要性について言及した。

第 2 章「先行研究」は、大きく以下 4 つから成る。初めに、日本人の発達障害児・者に焦点を当て、その診断・教育・子育てにおいて、医師・教師・保護者らがさまざまな課題に直面していることを示した。続いて、発達障害を有する外国人児童生徒について、外国人学校における障害・特別ニーズを有する外国人児童生徒の在籍状況等について概観した。また、就学先の決定については、外国人児童生徒に対するアセスメントの現状や課題、本当は障害がないにも関わらず誤った判定が下された事例についても報告した。最後の障害と能力の共存については、1920-70 年代に海外で報告された研究を紹介した後に、日本人の研究者による近年の研究について言及した。

第 3 章「障害と能力・才能は共存する－Twice Exceptional (2E)」は、2E (Twice Exceptional : 障害と才能を併せ持つ人々) の先進国アメリカにおける 2E の歴史、法律、定義、識別方法、各州における 2E 児童生徒の在籍状況と教育プログラムに関するものである。本章後半には、2021 年 11 月以降、メリーランド州のモンゴメリー郡公立学校に勤務する 2E の専門家やその他関係者から直接聞き取った情報も含まれている。本章で得られた知見として、障害と才能は共存し得ること、アメリカでは、発達障害に限らずさまざまな障害をもつ人々が 2E の対象となること、特別支援教育対象者の人種的背景を含むデータが

一般公開されていること、英語を母語としない子どもたちに対して、言葉を介さずに使用できる非言語性の知能検査（UNIT、NNAT、CogAT など）が使用されていること、長年に渡り一貫した 2E 教育を実践する地域や学校があることなどを挙げた。

第 4 章「発達障害とさまざまな能力を持ち合わせる人々—映画に見られる多様性」では、発達障害（特に自閉症・アスペルガー症候群）の人物が登場する映画 16 作品（1988-2020 年：アメリカ、韓国、フランス、日本、スウェーデン、イギリス、イスラエル、イタリア、インド、シエラレオネの人々について）を一覧にし、2E 的な特性を示す人物が登場する 5 作品の内容については詳しい説明を加えた。映画の登場人物は、発達障害という意味では共通しているが、一人一人の好きなことや得意なことは大きく異なり、障害に対する固定観念（例えば自閉症の人は他人との関わりを嫌う、コミュニケーションが苦手など）とは異なる真の姿が映し出されていた。発達障害の人々は一括りにされがちかもしれないが、実際は多様性に富む存在であること、彼らを愛し、見守り、応援し続ける人々（家族、教師、指導者、友人、恋人など）の大切さが描かれていた。

第 5 章「発達障害のあるヴァイオリニスト：廣澤大介氏」は、発達障害と音楽の能力が共存する事例である。廣澤大介氏（現在 40 歳）は、7 歳よりヴァイオリンを始め、2006 年 25 歳でプロのヴァイオリニストとしてデビューした人物である。軽い知的障害と広汎性発達障害と診断されて以来、20 年以上に渡り「学習障害」と思われていたが、2009 年には「広汎性発達障害に含まれる自閉症で、サヴァンの傾向が強い」と診断された。本章では、廣澤氏の生い立ちやこれまでの歩みに加えて、母親、フリースクール主宰者、ファンクラブ会長、3 人の音楽・ヴァイオリン指導者が行った療育や指導に 2E 教育的なステップが含まれていたことについて分析した。

第 6 章「発達障害のある版画家・画家：石村嘉成氏」は、発達障害と美術の能力が共存する事例である。石村嘉成氏（現在 27 歳）は、知的障害と自閉症があり、幼い頃から昆虫や動物などの生き物に対して並外れた興味・関心を持ち続けている。高校 3 年生の時に美術を学び始めて以来、さまざまな生き物を題材にした版画や絵画の作品は国内外で受賞を重ね、アーティストとして活動の幅を広げている人物である。本章では、石村氏の生い立ちやこれまでの歩みに加えて、両親、美術教師が行った療育や指導に 2E 教育的なステップが含まれていたことについて分析した。

終章では、本研究を通して得られた知見をまとめ結論とした。まず、障害や外国人などの「ラベル」を全て取り除き、人間というものだけが残った時に、その人の真の姿に近づくことができることについて、また廣澤氏と石村氏の事例から、本人の好きなことや得意なことを目ざとく発見・尊重してさらに伸ばすという方向性を持ち、発達障害児・者を療育、指導、応援する周囲の人々の存在が不可欠であることについて述べた。